第 18 回東川賞審査講評

海外作家賞	エドウィン・ズワックマン氏（Edwin ZWAKMAN）
国内作家賞	森村泰昌氏（もりむら・やすまさ）
新人作家賞	尾仲浩二氏（おなか・こうじ）
特別作家賞	風間健介氏（かざま・けんすけ）

想い起せば、昨年の夏も例年通り大雪山麓に集い、第 17 回の東川賞各賞受賞者の方々ともども受賞作品群を前に、時の流れ、社会の移ろい、そして不滅の創造性といったことを語り合う、豊かな心の交流の場を持ちました。しかしそのわずか 1 ヶ月余り後、あのいまわしい同時多発テロが起こり、この日を境にアフガン報復やパレスチナの混迷と、世界情勢は一挙に暗く重いものになったのです。このような時代の激動を直視せざるを得ない現代社会に生きる我われにとって、写真を始めとする映像情報がきわめて大きな意義をもっていることは、いま誰の目にも明らかです。東川賞の選考を委ねられた我われ委員会の面々も、その重みを噛み締めながら、本年も審査に臨んだ次第であります。

去る 3 月 12 日、東京青山の「こどもの城」で開催された審査会に準備されたノミネート作品は、例年より若干少な目でありましたが、これは世の景気動向を反映し、写真作品集の出版も低迷していることの影響でありましょう。しかしながら、質的にはなんら悲観材料はなく、むしろ写真という手段と、創り手、撮り手の積極性との関係を見るいい機会であったと思えます。

本年度の東川賞国内作家賞には、大阪生まれ、大阪在住の美術作家、森村泰昌氏が選ばれました。森村氏はいわゆる現代美術の領域で国際的に活躍するアーティストです。1980 年代半ばから、古典絵画の内側に入り込むユニークな写真作品の制作を始め、以後一貫して自らのポートレイトをモチーフとして「レンブラントの部屋」（1994 年、原美術館）や「美に至る病・女優になった私」（1996 年、横浜美術館）などを発表し続けてきました。いずれも、その制作の最終形態が写真であることに意味をもつ作品であります。今回の授賞の対象となった作品は、近年同氏が取り組み続けてきたメキシコの女性アーティスト、フリーダ・カーロをモチーフにした一連の作品（2001 年、大阪キリンプラザ）であります。自らが表現対象の人物へと化身し、その物語のなかに潜入するという方法論で複雑に入り組んだ現代芸術の迷宮に挑み、そこにあえて身を委ねる森村泰昌氏の探求の姿勢は、現代写真を考えるうえにも貴重な創作であると断言できましょう。

本年度の海外作家賞は、ＥＣ諸国のなかでも小さな国々が肩を寄せ合っているベネルクス 3 国を対象としました。現地での作家情報と作品資料の収集のため、委員会から山岸享子委員が去る 2 月に渡欧し、ベルギーのアントワープ、オランダのアムステルダム、ロッテルダム等を精力的に取材し、豊かな果実を手に帰国され、審査会へと漕ぎつけました。このベルギーやオランダは、周囲を影響力が強いフランスやドイツに囲まれながら、独自性がデリケートに表れる興味深い地域で、ことに近年、オランダの映像芸術の諸活動は国際的にも高い評価を受けています。

そうした環境のなかで今回の海外作家賞受賞者は、1969 年オランダのハーグ市生まれのアーティスト、エドウィン・ズワックマン氏に決定しました。ズワックマン氏は、都市景観と都市空間を写真に撮る作品を発表し続けていますが、そのシリーズが受賞対象作であります。ただし都市といっても、それは風景であれビルであれ、個人の住宅やその内部であれ、すべて作家自身が丹念に作り上げた模型なのです。彼は、自作の模型でオランダの景観のみならず、完璧に風土や気質までをも再現します。その写真化された作品は、一瞬目を疑ってはばからない精緻さで我われを圧倒します。人工の土地オランダに暮らす国民のなかに生まれた新しい視覚芸術に我われは注目し、これからの活躍にも期待をしたいと思います。

新人作家賞には福岡県出身で現在東京で活動を続けている尾仲浩二氏に授与することになりました。1960 年生まれの尾仲氏は、1988 年から 91 年まで、連続して 32 回にも及ぶ『背高あわだち草』と題した写真作品展を、自が主宰する「ギャラリー街道」で開催、高い評価を得ました。ギャラリーでの連続展を契機に、より広範な人びとにと同写真集も刊行し（91 年）、その後写真雑誌の連載などで地道に人気と信頼を獲得してきました。そうした活動が今回の選考の対象となった『Tokyo Candy Box』や『hysteric five』という写真集の出版へと繋がったと言えましょう。尾仲氏は、自らの視線と都市と自身の生きることの意味を、率直に重ね合わせる写真家です。そのオーソドックスともいえる姿勢に流行（はやり）すたりはありません。真摯さゆえにつねに新鮮な魅力に満ちた作品をもたらしてくれる人物です。

北海道と関係の深い写真活動を行ってきた写真家に与えられる特別賞は、夕張市在住の写真家、風間健介氏に決定しました。風間氏は三重県の出身で、70 年代末からの東京での写真活動を経て、1989 年夕張に居を移し、閉山廃鉱となった炭鉱を撮り続けて来ました。すでにその使命を終えた採炭のプラント群が、満天の星を仰ぐ夜空の下で朽ち果てるのを待つかのようにたたずむ映像は、石炭産業のたどった運命とあいまって見る者の感動を呼びます。また、風間氏は自ら「ＡＺＵＭＡ組」というグループの呼びかけをし、数多くの自主的なグループ写真展を実現してきました。東川町フォトフェスタにおいても、郷土資料館の庭での野外写真展は、いまやフォトフェスタの名物ともなっております。この野外展も氏の企画によるものです。

本年はキーワードとして、積極性ということばがふさわしい選考結果となったと思います。各受賞者、こぞって歴史や社会に無気力なままに流されることなく、自らの意図、自身の意思、自己の存在を積極的に確かめるべく、写真を手段とされております。以上が、本年度の東川賞選考についてであります。

東川賞審査会幹事委員　　平木　収

第 18 回東川賞《海外作家賞》"The Overseas Photographer Award"

エドウィン・ズワックマン（Edwin ZWAKMAN）
オランダ　アムステルダム市在住 1969 年 10 月 18 日　ハーグ市（オランダ）生まれ

1989 - 1993　ロッテルダム芸術大学
1992　　フランクフルト市立美術学校
1996-1997　国立美術学校／アムステルダム

第１８回東川賞《国内作家賞》 "The Domestic Photographer Award"

森村　泰昌
大阪市天王寺区在住

MORIMURA Yasumasa 1951 年 6 月 11 日　大阪生まれ。78 年京都市立芸術大学卒業。
80 年代半ばから古今東西の名作絵画に「なる」写真作品の制作を始める。

第１８回東川賞《新人作家賞》"The New Photographer Award"

尾仲　浩二
東京都渋谷区在住

1960 年 1 月 6 日 福岡県直方市生まれ
68　千葉県君津市に移住
78　新日本製鐵株式会社入社（80 年　同社退社）
82　東京写真専門学校（現・東京ビジュアルアーツ）卒業
以後フリーカメラマン
イメージショップ『CAMP』（新宿）　参加
84　『CAMP』解散
88　ギャラリー『街道』（新宿）　開設
92　『街道』閉鎖
93　『03FOTOS』（渋谷）　にて活動を始める
2002　『photographers' gallery』（新宿）　に参加、現在に至る

第 19 回東川賞《特別作家賞》"The Special Award"

風間　健介

北海道夕張市在住

1960 年 9 月 18 日　三重県に生まれる

1978　　東京に移住

　87　　北海道空知郡南幌町に移住

　89　　夕張市に移住